安場氏館跡発掘調査報告

―― 上野市喰代字和田所在 ――

１９９９・３

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県西部に位置する伊賀の地は、四方を山々に囲まれた地域です。この地域は、中世に活躍した土豪たちが残した数多くの城館が集中していることで知られています。

ここに報告する、上野市喰代字和田に所在する安場氏館跡も、周囲に土塁を巡らした中世城館の一つです。館跡の一部に上野大山田線緊急地方道路整備事業が計画されたため、平成10年度に事前の調査を実施し、記録保存したものであります。

ここにその結果を報告するとともに、今後の中世城館の研究の一助となることを希望しています。

また、当地域には、我々の祖先の残した数多くの歴史的遺産があります。文化財保護行政の一環として、今後もそれらの貴重な財産を保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上、発展に活用していくことに努め、我々の公共財産である歴史的遺産と公共事業との共存・共栄の道を模索しなければならないと考えています。

調査にあたっては、三重県県土整備部道路整備課および、上野市教育委員会などの関係機関の他、地元地区の多くの方々から様々な形でご協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

三重県埋蔵文化財センター

所 長　大 井 與 生

例　　言

1．本書は、三重県上野市喰代字和田に所在する安場氏館跡（やすばしやかたあと）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、平成10年度（主）上野大山田線緊急地方道路整備事業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部道路整備課から経費の執行委任を受けて実施した。

3．調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　調査第一課主事　松葉　和也
　　資料普及グループ研修員　松田　久司
面　　積　約100㎡
期　　間　平成10年６年22日～同年７月３日

4．調査にあたっては、安場俊一氏、地元喰代の方々をはじめ、三重県県土整備部道路整備課・伊賀県民局建設部道路整備課・上野市教育委員会からの協力を得た。

5．本書の執筆・編集は松田が行った。写真撮影については松葉、松田が行った。また、上野市教育委員会より写真提供を受けた。なお、室内整理作業、図面作成等は調査担当者と資料普及グループが行った。

6．本書の方位は真北を用いた。なお、磁針方位は、西偏６度30分（平成元年、国土地理院）である。

7．本書で報告した記録は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．前　　言 …… 1
　　1．調査の契機 …… 1
　　2．調査の方法と経過 …… 1
　　3．調査日誌（抄） …… 1
　　4．文化財保護法等による諸通知 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 2
Ⅲ．調査の成果 …… 5
　　1．現　況 …… 5
　　2．遺　構 …… 5
　　3．遺　物 …… 8
Ⅳ．結　　語 …… 10
　　1．館の形態 …… 10
　　2．館の規模 …… 10
　　3．館の構築時期 …… 10
　　4．おわりに …… 11

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡周辺地形図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 5
第４図　調査前測量図 …… 6
第５図　調査区土塁測量図 …… 7
第６図　土層断面図 …… 7
第７図　出土遺物実測図 …… 8
第８図　安場氏館跡・和田遺跡周辺地籍図、土地利用状況図(1986年当時) …… 10
参考図　安場氏館跡・和田遺跡縄張図 …… 11

表　目　次

第１表　城館一覧表 …… 3
第２表　遺物観察表 …… 9

図　版　目　次

図版１　調査区全景（北東から） …… 12
　　調査区全景（1986年当時　北東から） …… 12
図版２　表土除去後風景（北から） …… 13
　　調査後風景　トレンチ設定前（北から） …… 13
図版３　北側トレンチ土層断面 …… 14
　　南側トレンチ土層断面 …… 14
図版４　調査区近景（南西から） …… 15
　　作業風景 …… 15
図版５　出土遺物 …… 16

Ⅰ　前　　言

1．調査の契機

今回の安場氏館跡の調査は、平成10年度（主）上野大山田線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査である。安場氏館跡は、既に周知の遺跡としてその存在が知られており、今回は道路拡張のために現状保存困難な範囲について本調査を行うこととなった。

2．調査の方法と経過

事業地に県道が隣接する状況にあり、通行の安全からも掘削に制限が加えられることとなった。

土塁上に堆積していた表土については、人力掘削によって除去した。堀及びトレンチについては一部重機を使用した。廃土については、人力及び重機によって除去した。調査区の平面図（調査前測量図含む）は、平板測量により 1/100 でコンタ図を作成した。現地の発掘調査は、平成10年６月22日から開始し、同年７月３日に終了した。最終的な調査面積は、約100㎡である。

3．調査日誌（抄）

６月１日　調査前測量開始（松葉・松田・船越・坂倉）。
６月２日　調査前測量（松葉･松田･坂倉･木野本）。
６月４日　調査前測量（松葉・松田・坂倉・船越）。
６月５日　調査前測量（松葉･松田･木野本･船越）。
６月８日　調査前測量終了（松葉・松田・木野本・船越）。
６月11日　調査前測量。
　　図面の不備箇所を補足。
６月22日　調査開始。
　　作業員作業開始。
　　除草、立木伐採、表土除去。
６月23日　雨天のため作業員作業中止。
　　廃土除去。
　　上野市教育委員会（緑ヶ丘整理所）で、和田遺跡関連資料を見せてもらう。
６月24日　表土及び廃土除去。
　　土塁屈曲部内側に石積みが認められたが、石積み内側よりビニール等が確認され全ての石を取り外す。
６月25日　根切り、除草等写真撮影準備。
　　写真撮影。
　　平板測量。
６月26日　南側トレンチ設定。
　　南側トレンチ土層断面図作成。
６月29日　平板測量。
　　写真撮影。
　　北側トレンチ設定開始。
７月１日　北側トレンチ設定終了。
　　作業員作業終了。
７月２日　北側トレンチ土層断面図作成。
　　南北トレンチ設定。
　　写真撮影。
７月３日　堀部分の土層断面図作成。
　　層位別に掘削、遺物確認。
　　トレンチ埋め戻し。
　　現地調査終了。

4．文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかわる諸通知は、以下により文化庁長官等に行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官宛）
平成10年６月23日付道整第149号（県教育長通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官宛）
平成10年６月22日付教生第488号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（上野警察署署長宛）
平成11年２月12日付教埋第２－21号(県教育長通知)

Ⅱ　位置と環境

伊賀の国は、三重県の中央、西部に位置し、奈良県と境を接する小盆地である。東方には布引山系が分水嶺として連なり、雨水は、木津川（長田川）や柘植川、服部川等に集まり、木津川から、やがて淀川となり大阪湾に注いでいく。県内のほとんどの川が伊勢湾に注がれているのに対して、水系の違うこと、また位置的に畿内に近いことからも、この地域が県内でも特徴ある文化形成をしてきたことが窺われる。

安場氏館跡のある喰代地区は、分水嶺の位置にあり、標高250m前後の山麓部にある。西と北には狭い谷が開き、久米川の上流域、友生支盆地の最奥部に位置する。友生から比自岐、大山田にぬける分岐点となっており、交通の要所にある。この城館は、県道上野大山田線が喰代集落で北に折れる西側付近で、現在は安場俊一邸となっている。

当遺跡周辺では、縄文時代以前の遺跡はあまり知られていない。安場氏館跡（31）と重複する和田遺跡[①]（83）の発掘調査では、縄文時代早期の押型文土器及び掻器が検出されている[②]。弥生時代の遺跡については、周辺には、弥生後期の遺跡として、轟遺跡（76）高北遺跡（80）小上野遺跡（75）等が段丘上に分布している。

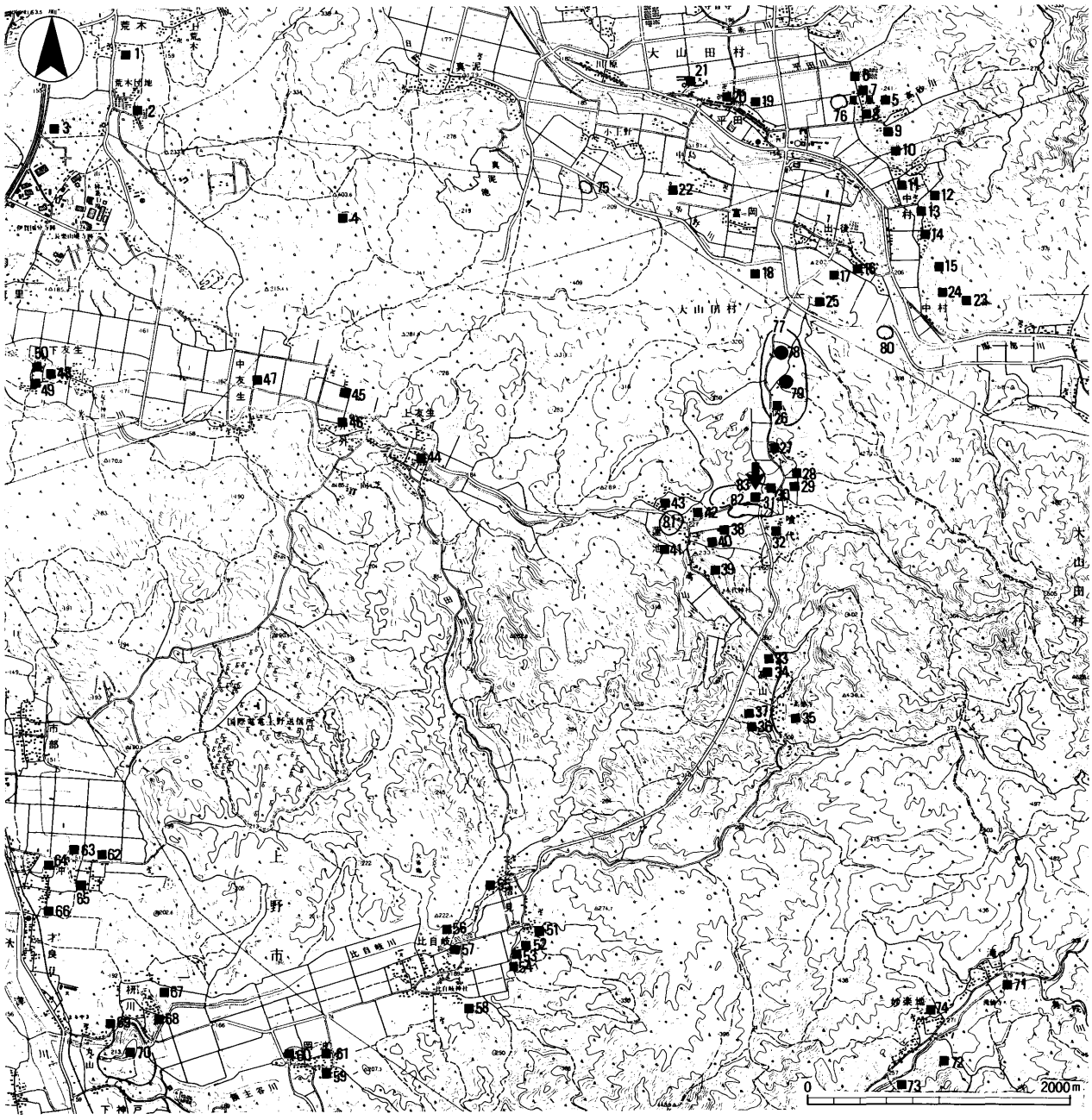
古墳時代にはいると、多数の古墳が周辺に築かれるようになる。中でも、高猿古墳群[③]（77）は、喰代集落の北側、大山田村との境界付近の狭い谷あい尾根の稜線および斜面に分布する古墳群である。特に高猿１号墳（79）は、銅鏡・勾玉・鉄器類等の豊富な副葬品とともに、蛤や鮑等の貝殻や魚骨が須恵器の中に収められていたことで知られている。最近では、昭和56年に、県営圃場整備事業に伴い発掘調査された高猿６号墳[④]（78）がある。なお、喰代地区周辺の弥生時代遺跡及び古墳時代の集落遺跡の所在については、確認されていない。

奈良時代の遺跡としては、喰代地区の西隣にある蓮池代遺跡[⑤]（81）があげられる。墨書土器、円面硯、緑釉陶器等の出土遺物や掘立柱建物群の一部が計画的に配置されていることから、奈良時代を中心とした平安時代をも含む公的性格の強い遺跡であると考えられている。

中世に入ると、喰代・蓮池・高山の狭い谷間に百地丹波城（32）等の多数の城館が集中して作られ、特徴的な城館集中地域となっている。周囲を丘陵によって囲まれ、その中に平野をもつこれらの地域は、自然的な地理環境においても細分化されており、小地域としての隔絶性を持っていた。また、中世以降の集落形成にあまり変化の無かった点でも共通している。そのせいか、これらの地域では戦国大名は出現せず、農村的性格をもつ、中小の土豪が共存していたようである[⑥]。城館は喰代地区だけでも、石ヶ谷砦（26）、喰代氏城（27）、奥氏城（28）、入屋敷寺（29）、安場氏館、和田城（30）、百地丹波城と列挙できるほどである。中でも百地丹波城は「三国地誌[⑦]」所載の「一宮黒党次第案」天文13年（1544年）に喰代もも地殿と名がみえ、北伊賀で勢力を持った土豪であったと推察される。三方土塁の主郭を中心に小郭や出丸などが残っている。城館の集中は、隣接地域でも同様で、蓮池地区では、西岡氏館（38）、吉田氏城（39）、上山氏城（40）、土田権右衛門館（41）、脇田氏城（42）、村井氏城（43）等があり、山田支盆地では、風呂谷館、阿波氏館、小野氏館、井上氏城（14）、永井氏城（25）、副持氏城等がある。高山では、清水城（33）、島地氏城（34）、大久氏城（37）、高井将監城（36）、高塚砦（35）があり、比自岐盆地では、四方が土塁に囲まれた形態だけで、瀧川三朗兵衛砦（69）、城氏館（67）、竹田氏館（61）、岡波館（59）、荒堀長川館（57）、西氏城（56）、荒堀氏城（52）、竹岡氏城（53）とこれだけ挙げることができる。

また、安場氏館跡周辺で、中世の集落跡の遺跡としては、昭和56年に発掘された、安場氏館跡と久米川を挟んで対岸にある馬場遺跡[⑧]（82）がある。掘立柱建物が２棟確認されており、その出土遺物は、サヌカイトやチャートの剥片から近世陶器にまで及ぶが、数量的に中心となるのは中世土器である。

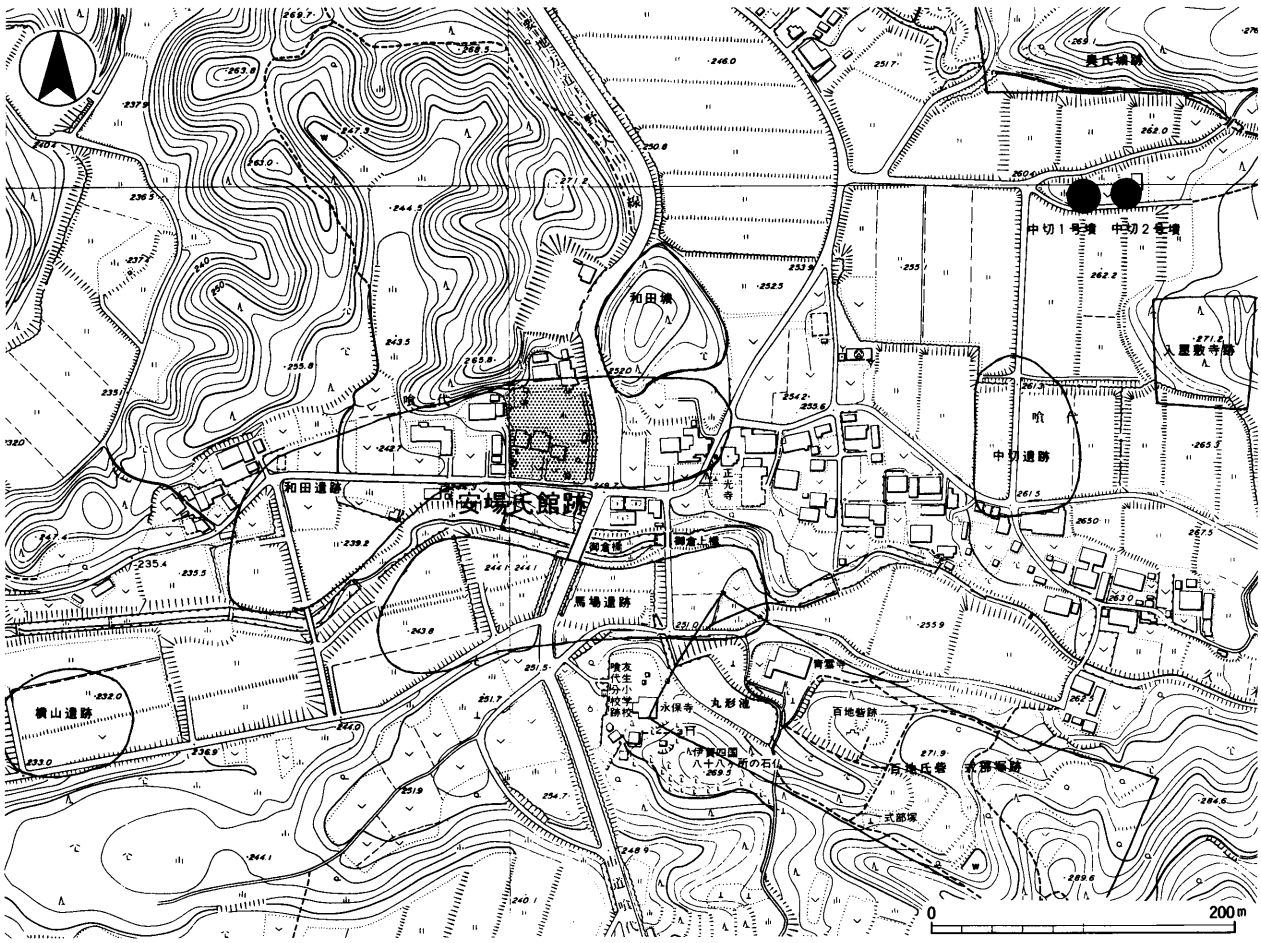
安場氏館跡と規模のよく似た遺跡としては、風呂谷館跡[⑨]がある。風呂谷館跡は昭和58年度県営圃場整



第１図　遺跡位置図　１：50,000（国土地理院　１：25,000『上野』より）　■…中世城館　●…古墳
実線内は遺跡範囲

1	荒木氏館	12	山田氏城	23	大江公通城	34	島地氏城	45	安田氏館	56	西氏城	67	城氏館
2	竹本氏館	13	南出砦	24	角部城	35	高塚砦	46	塚本館	57	荒堀長川館	68	嵯峨尾主馬砦
3	池田氏館	14	井上氏城	25	永井氏城	36	高井紹監城	47	田中氏城	58	馬場東館	69	滝川三郎兵衛砦
4	城山城	15	長持氏城	26	石ヶ谷砦	37	大久氏城	48	山ノ井氏館	59	岡波館	70	丸山城
5	久保氏城	16	出後氏館	27	喰代氏城	38	西岡氏館	49	西岡氏館	60	浅野宅	71	滝三河館
6	轟西城	17	中出山城	28	奥氏城	39	吉田氏城	50	中切館	61	竹田氏館	72	妙楽寺城
7	轟城	18	岡山氏城	29	入屋敷寺	40	上山氏城	51	重富氏館	62	藤島氏館	73	藪内氏城
8	沖氏館	19	平田城	30	和田城	41	土田権右衛門館	52	荒堀氏城	63	菊田氏館	74	松田氏城
9	前山城	20	箸尾氏館	31	安場氏館	42	脇田氏城	53	竹岡氏城	64	藤田氏館		
10	岡島氏城	21	米野氏館	32	百地丹波城	43	村井氏城	54	中川氏館	65	高田氏館		
11	北坂城	22	菱野氏城	33	清水城	44	沢氏城	55	三藤氏城	66	貝野氏館		

第１表　城館一覧表



第２図　遺跡周辺地形図　１：5,000（上野市都市計画図　１：2,500より）

備事業に伴いほぼ全面発掘調査された、4,000㎡前後の小規模城館である。四方を堀で囲み、館内からは12棟の掘立柱建物と土塁・土坑・井戸・溝・柱穴群等が検出されている。注目すべき点は、館内に遺構が区画配置されている点で安場氏館跡も地籍図から館内が区画されている様子を窺うことができる。

中世後半から近世にかけては、天正年間の織田信長勢の侵攻に代表されるように、外的に対する備えの必要性や、他国の築城技術の影響から、築城方法や改造補修に、城館の形態の変化が見られるようになってくる。中でも、「天正伊賀の乱」の先駆となった織田側の拠城、丸山城（70）は、従来の伊賀型の城とは違い山全体を利用した城で、中世の城としては県内最大級といえる。[10]

「天正伊賀の乱」後、伊賀の国は大名による一国支配へと移行する。この変化の中で在地土豪たちは「無足人」という形で幕藩体制下に組み込まれていく。[11]なお、安場氏館跡は、江戸期は庄屋安場家の屋敷となっていたようである。[12]

［註］

① 山本雅靖『和田遺跡発掘調査報告』（上野市教育委員会、1986年）。
② 現在所在不明。
③ 『三重県の地名』（「日本歴史地名大系第24巻」平凡社、1983年）。
④ 吉村利男「上野市喰代　高猿６号墳」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1981年）。
⑤ 森前　稔「上野市蓮池　蓮池代遺跡」（『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1982年）。
⑥ 山本雅靖「城館研究の視点と方法の展開－伊賀地域における考古学的城館研究－」（『中世の城と考古学』新人物往来社、1991年）。
⑦ 『定本三国志下巻』（上野市立図書館、1987年）。
⑧ 森前　稔・山田　猛「上野市喰代　馬場遺跡」（『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1982年）。
⑨ 森前　稔・伊藤久嗣「阿山郡大山田村　風呂谷遺跡」（『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1984年）。
⑩ 福井健二「伊賀の中世城館（Ⅱ）－城の形態と戦国期の変化」（『図説　伊賀の歴史（上巻）』郷土出版社、1992年）。
⑪ 久保文武『伊賀国無足人の研究』（同朋舎、1991年）。
⑫ 『伊賀の中世城館』（伊賀中世城館調査会、1997年）。

Ⅲ　調査の成果

1．現　　況

土塁は安場邸周囲及び北側耕地西に残存している。東側は倉庫が建てられていたり通路として利用されており削平を受けている。土塁は西側の最も高い所で比高約2.6mを、東側では約1.4mを測る。館跡は北側耕地部にあったとされている。耕地部の更に北側には池及び水田があり、堀跡を残しているように思われる。

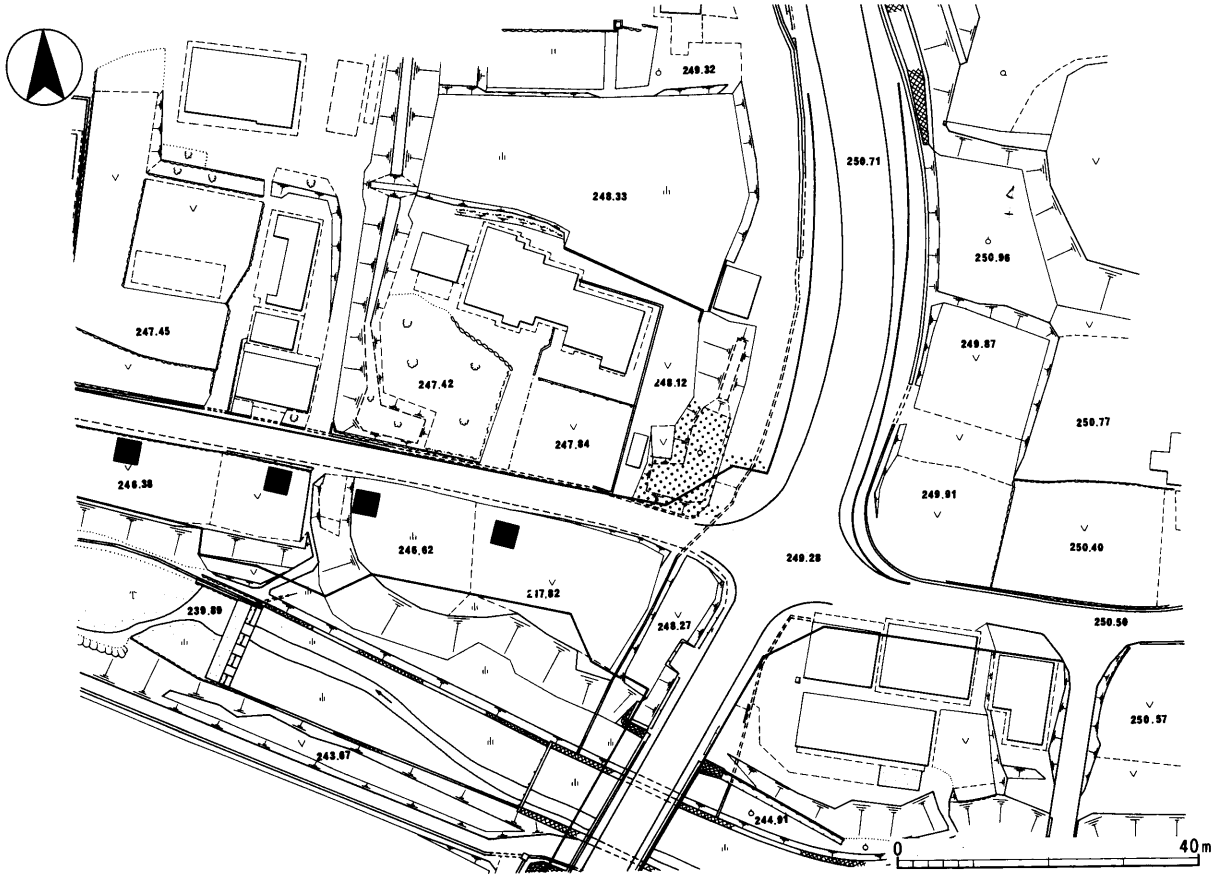
2．遺　　構

今回の調査は約100㎡という狭い範囲であったが、調査の結果、東側土塁外側に堀の一部を確認することができた。また、調査前に土塁全体の測量を実施し、土塁の全体像が概ね明らかになった。

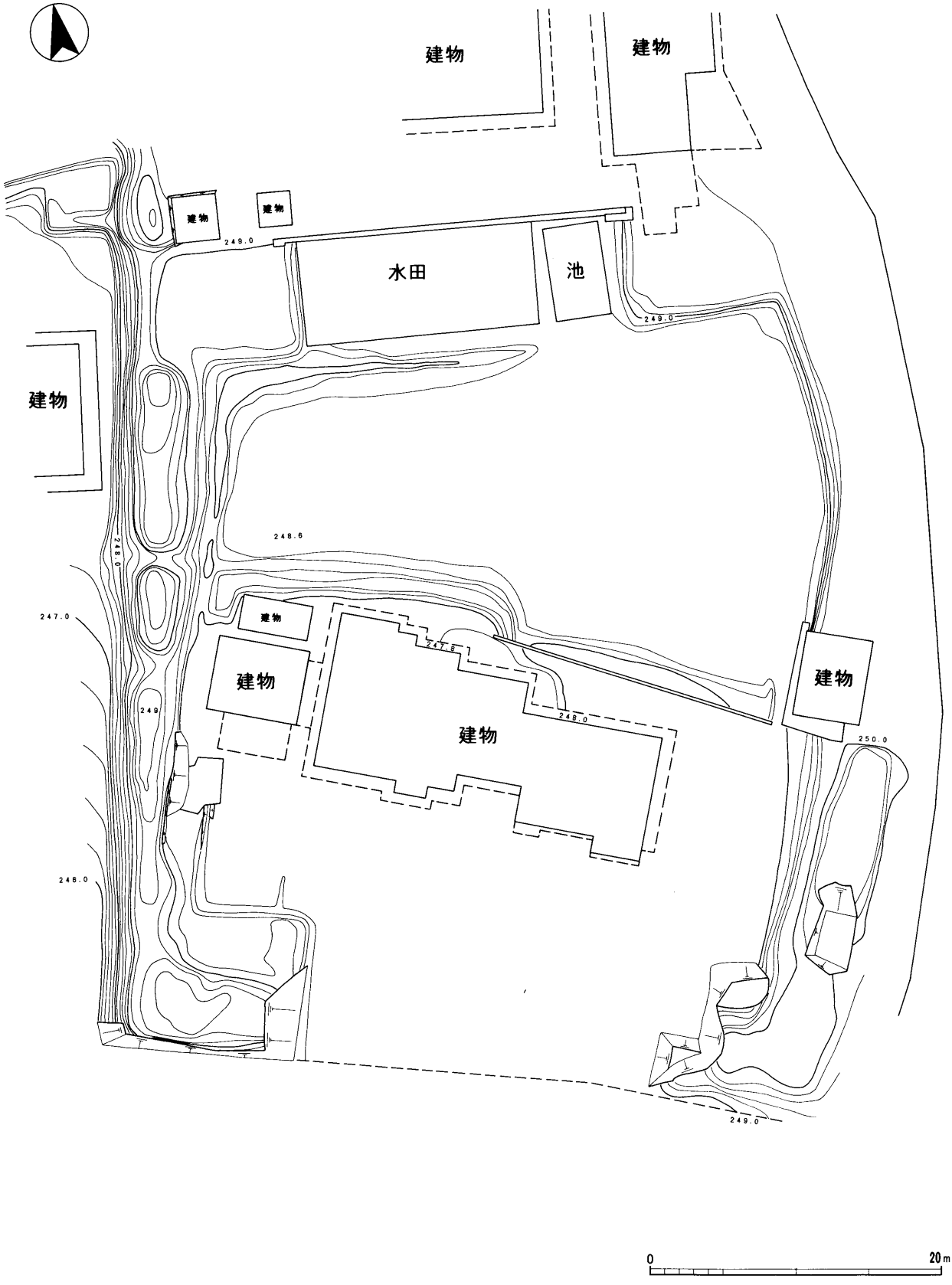
(1)土塁

土塁部は、調査範囲内では、ほぼ全体が残存していると考えられていた。しかし、予想以上に削平が激しく、最初土塁の一部と考えられていた東側土塁屈曲部でも、畑で使用されたビニールや廃材等が確認され近年の盛土であることが判明した。

高さ、幅を、調査範囲内北側トレンチで測定すると、基底幅は６ｍ以上、高さが1.5m以上である。土層の断面は山形を呈し、堀側で急角度に落ち込む。上部には比較的緩やかな平坦面があり、館側に向かって、緩やかにその高さを減じていく。層序については、最下層よりオリーブ褐色砂質土、暗オリーブ褐色砂、黒褐色土が積まれ、その上にオリーブ褐色土、暗オリーブ褐色土、オリーブ褐色砂、オリーブ褐色砂質土といった順に築成されている。なお、旧表土については事業地の状況から掘削に制限が加えられたため、明確にすることはできなかった。南側トレンチでは、オリーブ褐色系の上位３層を確認することができた。トレンチを入れた位置の関係上、深く



第３図　調査区位置図　１：1,000　　■…試掘坑



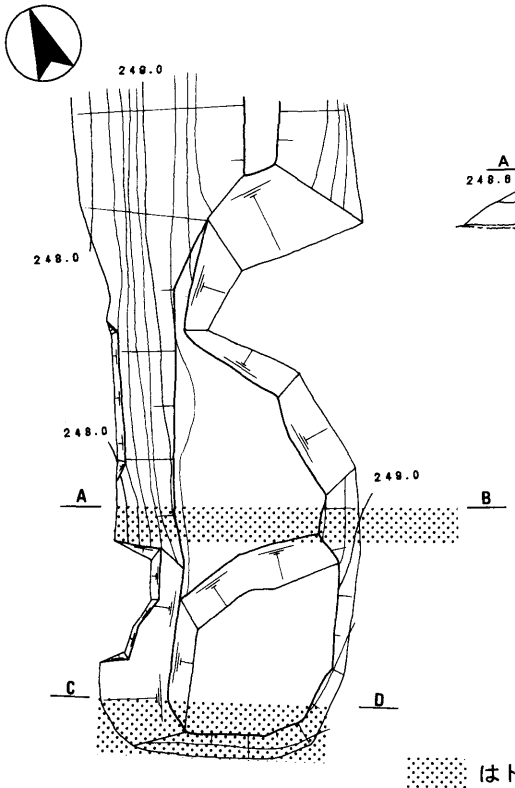
第４図　調査前測量図　１：400

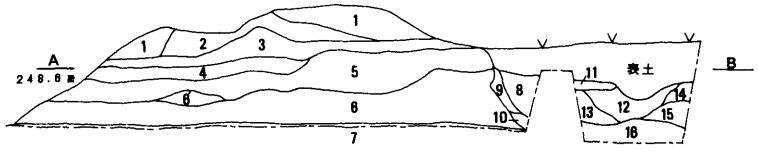
掘り下げることができなかったが、北側トレンチの断面観察との対応から、土塁が北から南にかけて緩やかに傾斜していることがわかる。また、南側トレンチ上層の、オリーブ褐色砂質土及びオリーブ褐色砂の残り具合の良さからも、北側トレンチ上部には、かなりの削平が加えられたことが窺われる。

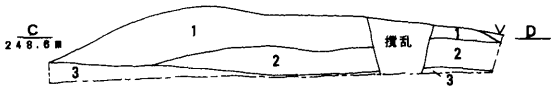
⑵堀

昭和51年に広域市町村道路改良工事に伴い発掘された和田遺跡[①]の調査では、西接する安場氏館跡の堀を確認するまでには至らなかった。しかし、調査後行われた側溝集水施設の設置工事の際、無遺物ではあったが、厚い暗黒青色粘質土層が確認されたことが報告されている。

今回の調査では、北側トレンチ土塁東部に、黄灰色系の粘質土及び灰色系の粘質土を確認した。土塁の最下層と比べても際立った違いがあり、堀埋土の堆積土と確認することができた。ただ、調査区が県道上野大山田線に隣接していることや、トレンチ内に水道管が通っていることから、堀の東岸や深さまで確認することは出来なかった。







はトレンチ範囲

0　10m　　0　4m

1. Hue2.5Y　4/3　オリーブ褐色砂質土　φ5mm砂利含む
2. Hue2.5Y　4/6　オリーブ褐色砂　φ5mm砂利多く含む
3. Hue2.5Y　3/3　暗オリーブ褐色土　φ10cm礫若干混入（他に比してしまっている）
4. Hue2.5Y　4/4　オリーブ褐色土　φ10cm礫若干混入
5. Hue2.5Y　3/1　黒褐色土　φ5cm小礫混入
6. Hue2.5Y　4/4　オリーブ褐色砂　φ～10cm小礫多く混入
6. Hue2.5Y　3/3　暗オリーブ褐色砂　φ～10cm小礫多く混入
7. Hue2.5Y　4/6　オリーブ褐色砂質土　φ20cm礫混入
8. Hue2.5Y　5/1　黄灰色粘質土　φ5cm礫若干混入
9. Hue2.5Y　5/2　暗黄灰色粘質土　φ5mm砂利混入
10. Hue2.5Y　5/1　黄灰色粘質土
11. Hue2.5Y　5/1　黄灰色粘質土　φ5mm砂利、φ5cm礫混入
12. Hue N　5/0　灰色粘質土
13. Hue2.5Y　5/1　黄灰色粘質土
14. Hue2.5Y　5/1　黄灰色粘質土　φ5mm砂利混入
15. Hue2.5Y　5/2　暗黄灰色粘質土　φ10cm礫混入
16. Hue N　3/0　暗灰色粘質土　φ10cm礫若干混入

第5図　調査区土塁測量図　1：200　　第6図　土層断面図　1：100

［註］

① 山本雅靖『和田遺跡発掘調査報告』（上野市教育委員会、1986年）。

3．遺　物

今回の調査では、調査範囲が100㎡と狭い面積であったことや調査対象が土塁及び堀の一部であったため、遺物の出土は大変少なく、瓦器の破片を中心に整理箱に２箱程度であった。それらの中から瓦器と擂鉢については、山田猛氏の編年研究に基づいてその時期を考えることとする。以下、出土遺物の概略を記述する。[①②]

(1)土塁出土の遺物

土師器には、１の甕、３の皿、４の鍋、５の大和型羽釜があり、いずれも小片である。時期的には１は12世紀頃、３は13世紀頃、４は16世紀前半、５は13～14世紀と推定される。瓦器には、７、９～12があり、いずれも椀の小片である。時期的には７は山田編年Ⅱ段階４型式に当たる13世紀前半、９～11はⅢ－３に当たる13世紀後半～14世紀前半、12は、暗文の状態から、Ⅲ－１に当たる13世紀前半と推定される。陶器には、14の甕、16、17の擂鉢、18の練鉢があり、14、16、17は信楽、18は常滑産である。時期的には、14は15世紀前半、16は山田編年Ⅱａ型式に当たる14世紀終わり頃、17はⅢｂに当たる16世紀前半、18は13世紀前半と推定される。瓦には、19の軒丸瓦、20の三つ巴の鳥衾がある。時期的には近世と推定される。

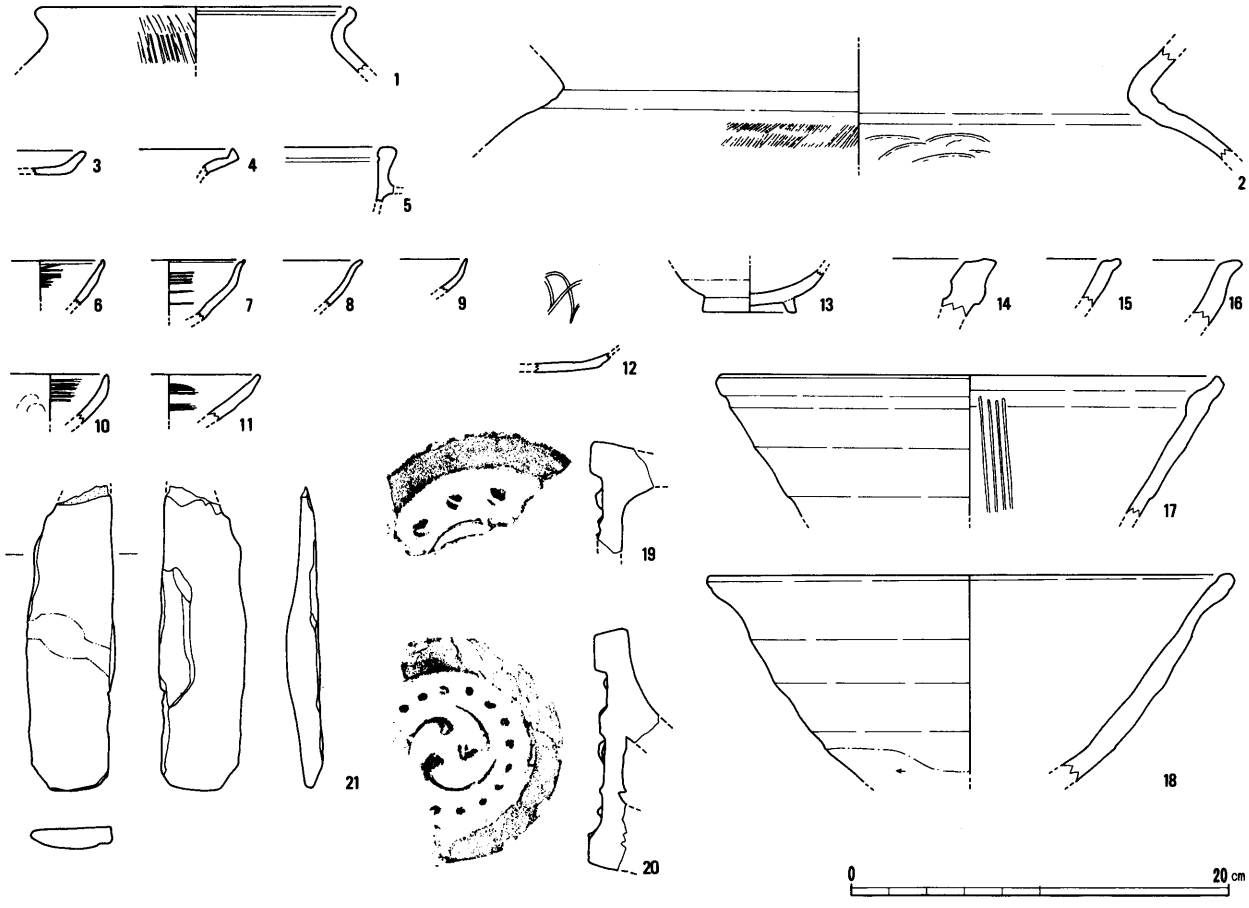
(2)堀出土の遺物

須恵器には、２の甕がある。時期的には古墳時代後期と推定される。瓦器には６、８があり、いずれも椀の小片である。６はⅡ－３に当たる12世紀後半、８はⅢ－２に当たる13世紀代と推定される。陶器には、13の椀、15の擂鉢がある。13は再興伊賀である。時期的には13は近世後期、15はⅣｂに当たる15世紀後半と推定される。

［註］

① 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」(『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会、1986年)。

② 山田猛「下郡遺跡群出土の擂鉢」(『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会、1990年)。



第７図　出土遺物実測図　１：４

報告番号	登録番号	器　種	出土位置	計測値（cm）	調整（技法）の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考
1	002-02	土師器 甕	土塁 南側 トレンチ1層	口径　(17.2)	外面ハケ目。3 本／cm	密	並	灰白色 Hue7.5YR8/2	口:1/12	器面磨滅
2	002-01	須恵器 甕	堀 北側トレンチ	口径　(33.8)	外面タタキ。内面同心円。	密	良	灰色 HueN6/	頸:1/12	器面磨滅
3	003-04	土師器 皿	土塁 表土		口縁部横ナデ。底部外面及び内面ナデ。	密	並	灰色 Hue10YR8/2	小片	
4	002-04	土師器 鍋	土塁 北側トレンチ		口縁部外面及び内面ナデ。	密	良	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	小片	
5	002-03	土師器 羽釜	土塁		口縁部外面及び内面ナデ。	密	並	浅橙色 Hue10YR8/4	小片	大和型
6	002-06	瓦器 椀	堀 北側トレンチ		外面は一部にヘラ磨き。内面ヘラ磨き。端部内側に沈線1 本。	密	良	灰色 HueN6/	小片	
7	002-05	瓦器 椀	土塁 表土		外面未調整。内面ヘラ磨き。端部内側に沈線1 本。	密	良	灰色 HueN4/	小片	
8	001-06	瓦器 椀	堀 北側トレンチ		外面及び内面ナデ。燻しなし。	密	良	灰白色 Hue2.5Y8/1	小片	
9	001-07	瓦器 椀	土塁 表土		外面は未調整。口縁部及び内面ナデ。	密	良	灰色 HueN6/	小片	
10	001-04	瓦器 椀	土塁 表土		外面未調整。口縁部ナデ。内面ヘラケズリ。燻しなし。	密	良	灰黄色 Hue2.5Y	小片	
11	003-01	瓦器 椀	土塁　南北 トレンチ3層		外面未調整。口縁部ナデ。内面ヘラ磨き。	密	良	灰色 HueN4/	小片	
12	004-02	瓦器 椀	土塁　南側 トレンチ1層		底部内面に暗文あり。	密	良	灰色 HueN6/	小片	
13	003-03	陶器 椀	堀 北側トレンチ	高台径　5.0	外面上部及び内面に施釉。底部ロクロナデ。	密	良	灰白色 Hue5Y8/2	底部	再興伊賀
14	001-03	陶器 甕	土塁　南北 トレンチ2層		外面及び内面にロクロナデ。	密	良	橙色 Hue2.5YR6/6	小片	信楽
15	001-05	陶器 擂鉢	堀 北側トレンチ		外面及び内面にロクロナデ。	密　2 mm以下の砂粒含む。	良	赤色 Hue10R5/8	小片	
16	001-01	陶器 擂鉢	土塁 表土		外面及び内面ナデ。	密　2 mm以下の砂粒含む。	良	淡黄色 Hue2.5Y8/3	小片	信楽
17	001-02	陶器 擂鉢	土塁	口径　(26.6)	外面及び内面ナデ。櫛目3 本／cm	密　4 mm以下の砂粒含む。	良	淡黄色 Hue2.5Y8/4	口:1/8	信楽 内面は、ツルツルしており使用の跡あり。
18	003-02	陶器 線鉢	土塁　南側 トレンチ1層	口径　(27.2)	外面及び内面に自然釉。外面底部ロクロ削り。	密　5mm以下の砂粒多く含む。	良	灰黄色 Hue2.5Y7/2	口:1/6	常滑
19	005-01	軒丸瓦	土塁 表土	径　(14.0)	外縁及び内縁部、瓦当部周縁部ナデ。	密	良	暗灰色 HueN3/	瓦当部: 1/6	
20	005-02	鳥衾	土塁 表土	径　11.9	外縁及び内縁部、瓦当部周縁部ナデ。瓦当部裏面に接着のためのキズ有り。	密	良	灰色 HueN5/	瓦当部: 1/2	三つ巴
21	004-01	緑泥片岩 石英片岩 砥石	土塁 表土	長さ　16.0 幅　4.6 厚さ　1.7						表面及び1 側面に使用痕

第２表　遺物観察表

Ⅳ 結　　語

今回の調査地は、土塁と堀推定部の一部の約100㎡という限られた狭い範囲であったが、調査前測量の結果も含め以下のことが明らかになった。

1．館の形態

調査区内の土塁は、調査前の予想以上に攪乱を受けた上に盛土がなされていることが判明した。調査前西方向に曲がっていた土塁部分も全て近年の盛土であることが判った。そのため、土塁の旧状を想定するにあたり、２つの案が考えられた。

A．現在は攪乱を受け盛土となっているが、旧状もやはり西方向に屈曲していた。
B．屈曲部分は近年に造られたもので、旧状はこの部分では屈曲していなかった。

旧状を知る手がかりの一つとして地籍図を用いた結果、土塁南部、上野大山田線を挟んだ地点に遺構を思わせる地割りを確認することができた。そこで、土塁はこの部分では屈曲せずに更に南に延びる可能性を想定し現況を確認した。

その結果、調査範囲の屈曲部は本来の形状を留めてはいないが、南西角の土塁内側の屈曲は本来の形状を留めているように見えることを確認した。

また調査に先立って行われた試掘調査では、館跡南側及び西側土塁延長上に調査を実施しており、何れの地点からも遺構・遺物は発見されておらず遺跡範囲外とされている。以上の結果から、B案の可能性は低いものとし、A案を採用したいと考える。

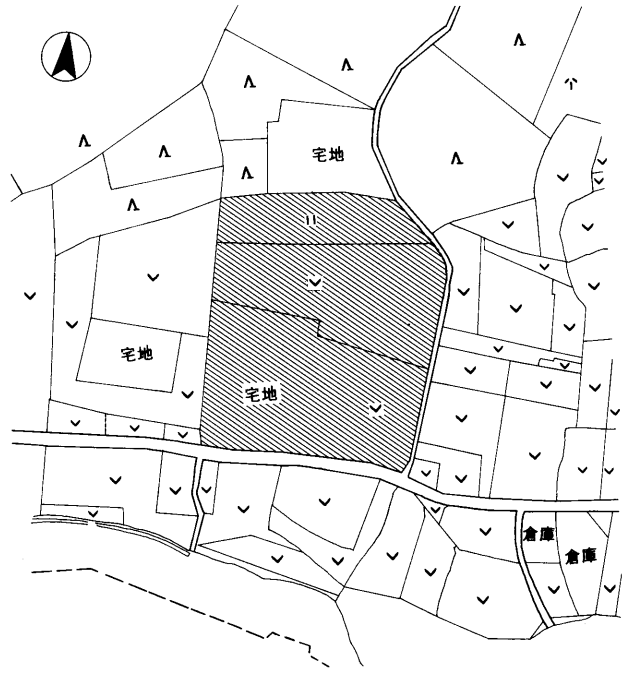
調査前測量及び現況、調査所見から、館の形状は周囲を堀に囲まれた単郭四方土塁城館であったと考える。郭内部については今回は調査範囲外であるが、調査前測量で郭内を区画するような段差を確認することができた。この段差は北側耕地と現在の安場邸との境目付近にある。耕地側では、溝があったり耕されたりして区画ははっきりしないが、耕地と安場邸の境にあるブロック塀内側から安場邸に向かってはっきりとしたラインを確認することが出来た。また、地籍図からも館内が区画されている様子を思わせる地割りを確認することができた。この郭内の段差については、森川常厚氏の指摘する「逆E字区画」が採用されている可能性を示していると思われる。今後の調査が待たれる所である。[①]

2．館の規模

今回の調査で堀については、調査区の制限から館の東側の堀の一部を確認したにすぎず、東岸については検出できていない。堀を除いた城館規模は土塁外側で東西約50m・南北約60mであり、この規模の中世城館は伊賀地域では最も多く見られる大きさである。[②]

3．館の構築時期

今回の調査は、土塁及び堀推定部の調査であり、また遺物の出土量も大変少なく、館の構築時期を考える材料としては不十分である。また、重複する和田遺跡からの遺物の流入も考えられる。その中の数少ない手がかりから時期を推定する。そのために、土塁内の遺物より構築時期を推定する。



第８図　安場氏館跡・和田遺跡周辺地籍図、土地利用状況図（1986年当時）

土塁内の遺物から築城の上限を推定するため、時期の新しい遺物を選びだすと土師器鍋（4）、信楽擂鉢（17）が挙げられる。時期は前述した通り16世紀前半と推定される。

また同様に、堀埋土の遺物よりその埋没時期も推定できる。時期の新しい遺物を選びだすと再興伊賀の椀（13）が挙げられる。時期は前述した通り近世後期と推定される。

いずれも小片であり、また少量であることから明確に時期を比定できる資料とは言い難いが、館の構築時期を16世紀前半、堀の最終埋没時期を近世後半頃と推定したい。

4．おわりに

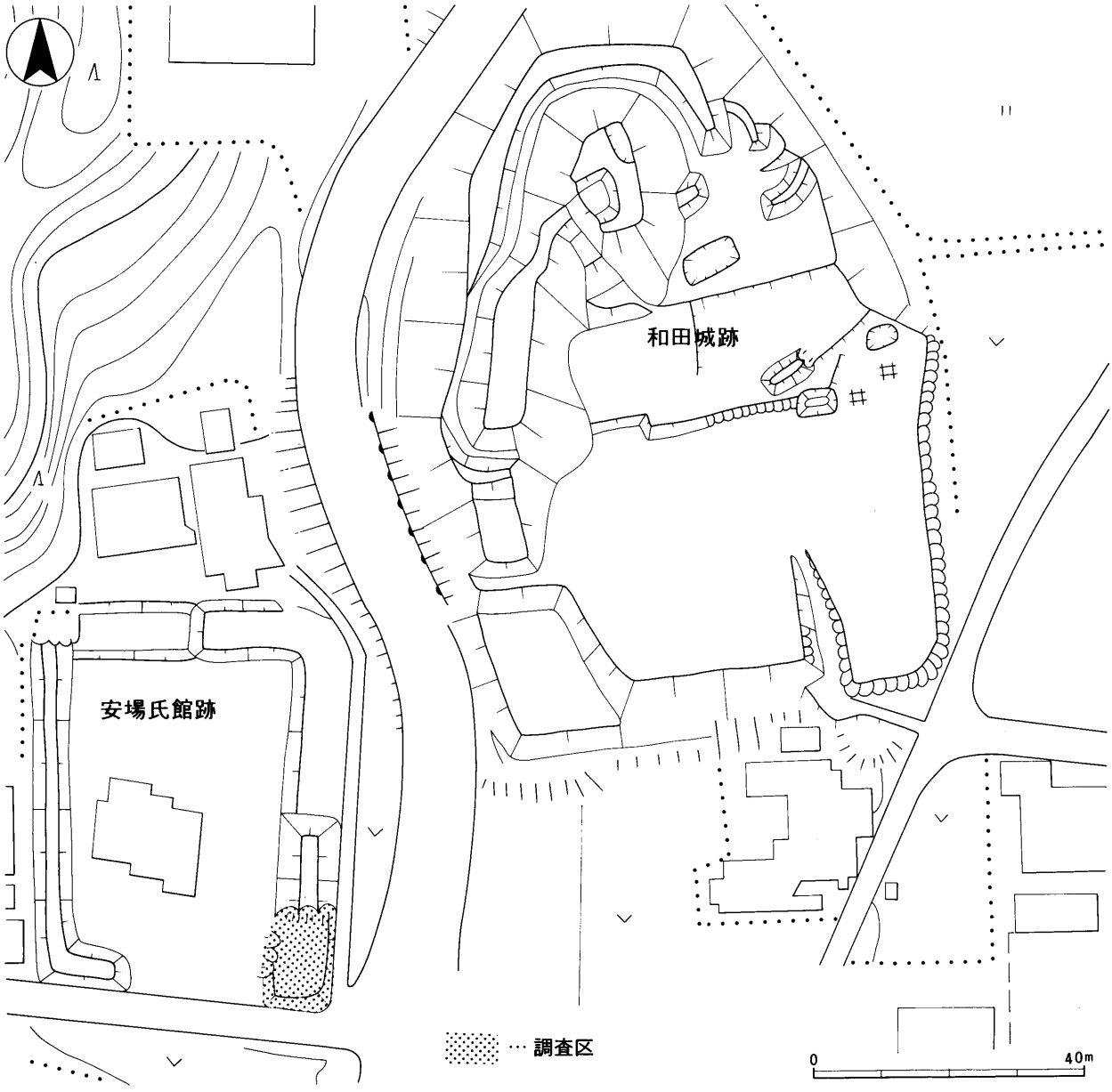
今回の調査は、限られた範囲の中での調査であり、郭内の様子はもちろん、堀の全幅、深さ等の詳細についても十分に調査されていない。より具体的な結果を得、館跡の全容を明らかにするためには、今後更に十分な調査及び検討を必要とするであろう。

今後、発掘調査の機会を得た際には、今回の成果を活用して頂くことを期待する。

［註］

① 森川常厚「伊賀中世城館の郭内区画と遺構配置」（『研究紀要第４号』三重県埋蔵文化財センター、1995年）。

② 「三重の中世城館」（三重県教育委員会、1977年）。



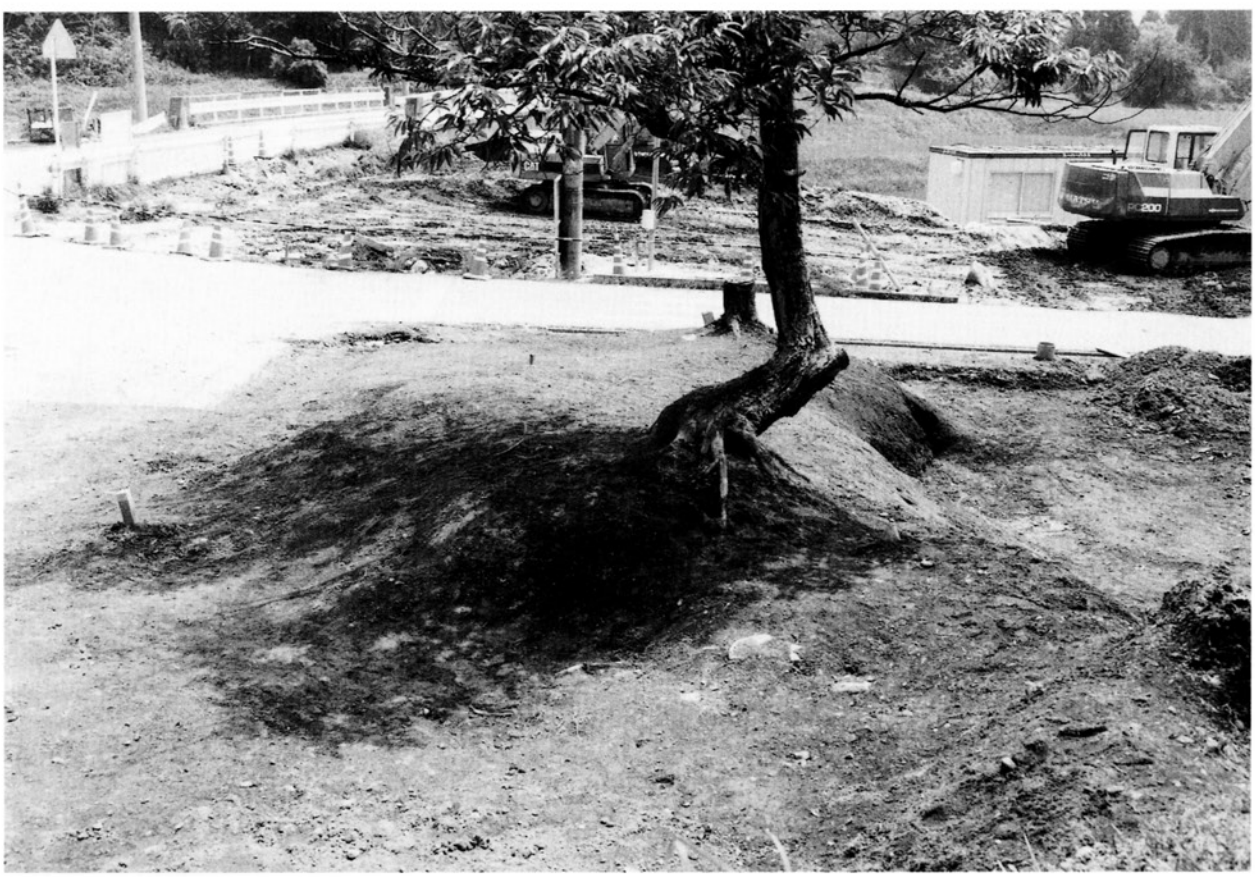
参考図　安場氏館跡・和田城跡縄張図　1：1,000　『伊賀の中世城館』（伊賀中世城館調査会、1997年）所収のものを再トレース

図版１

調査区全景（北東から）

調査区全景（1986年当時　北東から）

表土除去後風景（北から）

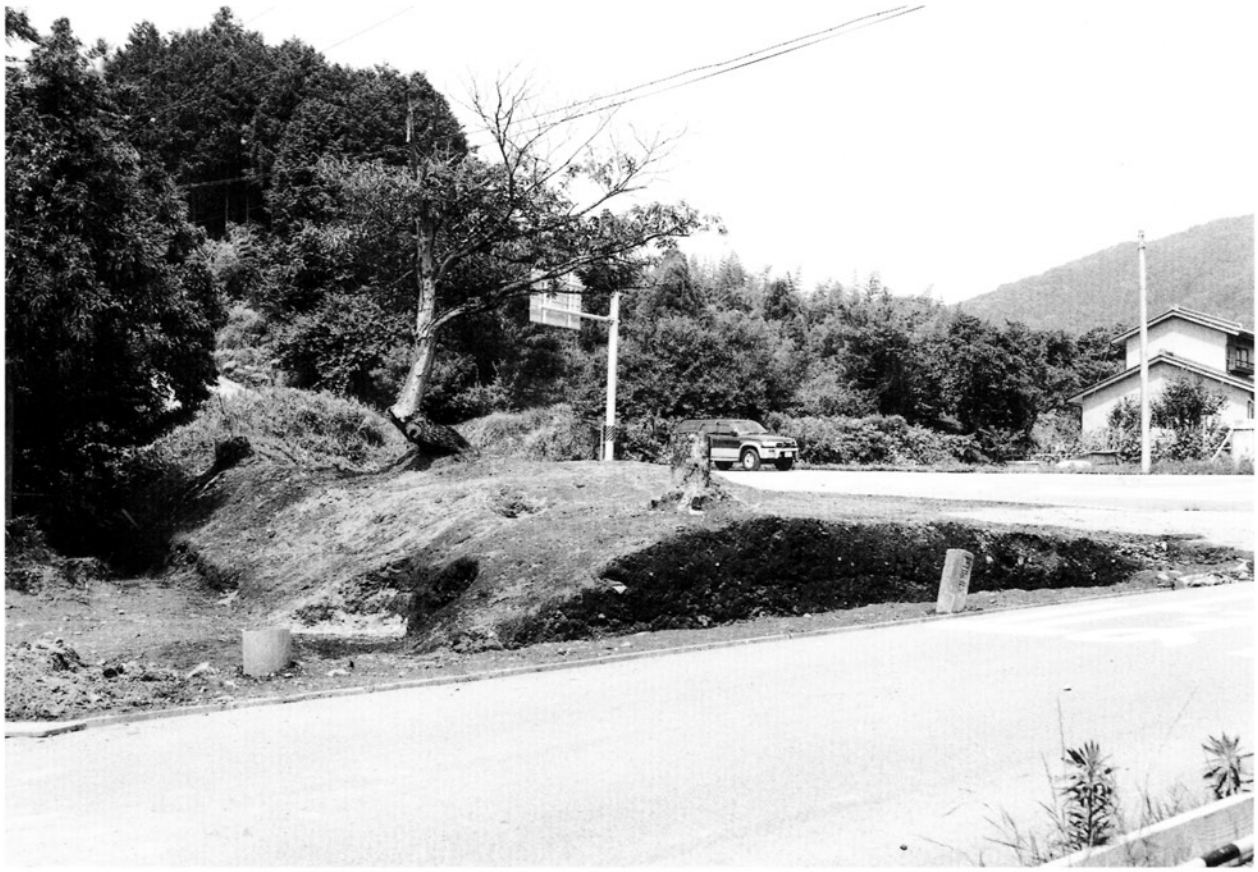


調査後風景　トレンチ設定前（北から）

図版３

北側トレンチ土層断面

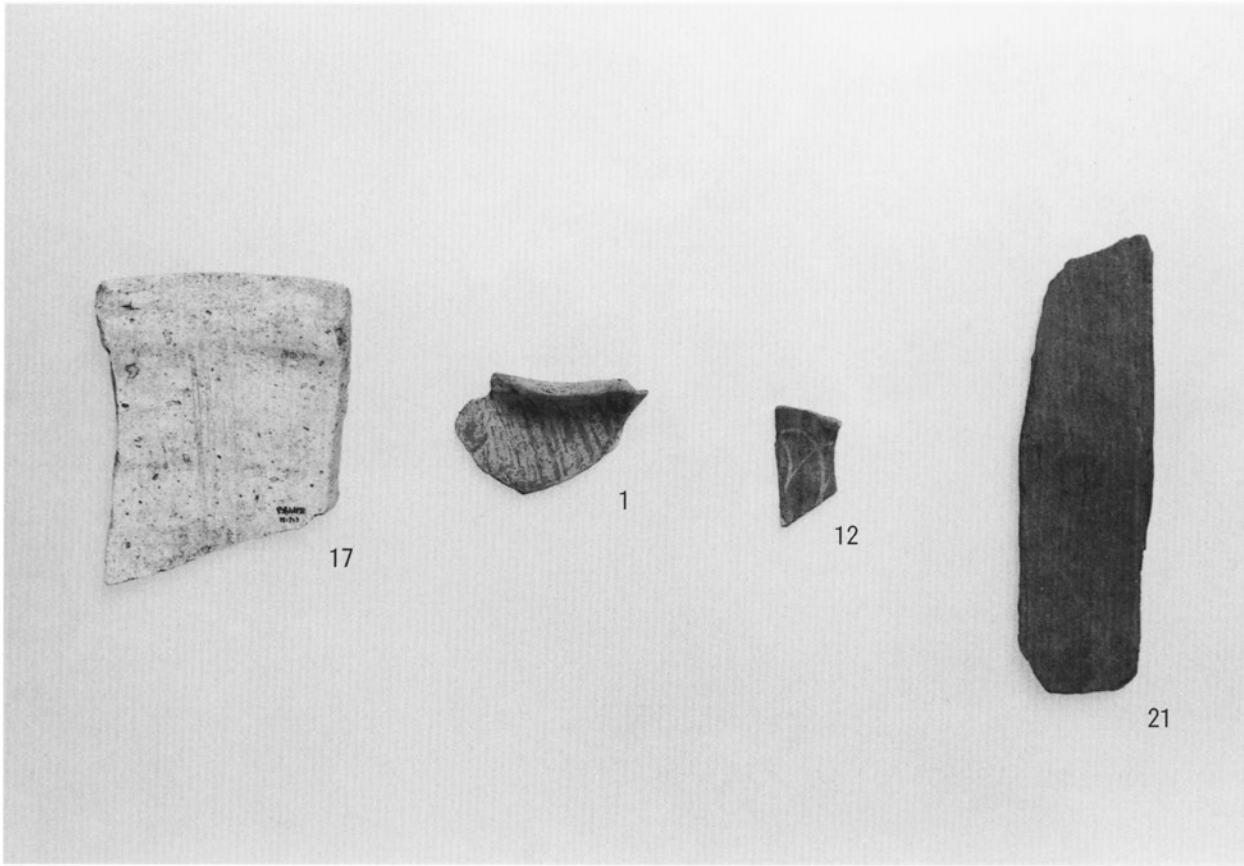
南側トレンチ土層断面



調査区近景（南西から）

作業風景

図版５



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やすばしやかたあとはっくつちょうさほうこく
書名	安場氏館跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	191
編著者名	松田　久司
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　ＴＥＬ 0596－52－1732
発行年月日	1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
やすばしやかたあと 安場氏館跡	みえけんうえのし 三重県上野市 ほおじろわだ 喰代和田	24206	618	34°44′09″	136°13′11″	19980622 ～ 19980703	約100	（主）上野大山田線緊急地方道路整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
安場氏館跡	館跡	鎌倉、室町時代	土塁、堀	土師器甕・鍋・皿、須恵器甕、瓦器椀、陶器椀・擂鉢・練鉢・甕、瓦、砥石	

平成11(1999)年３月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年９月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　191

安場氏館跡発掘調査報告

1999（平成11年）年３月31日

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社